

令和4年度 研究基本方針

京都市立稲荷小学校

研究部

1 研究主題

人と人とのかかわりの中で心豊かに考動する子どもの育成

～子どもたちが生き生きと学ぶ「特別の教科 道徳」を通して～

～子どもの感性に寄り添う「特別の教科 道徳」を通して～

2 主題設定の理由

価値観の多様化や人間関係の希薄化等に伴い、子どもたちの人とより良く関わる力や困難を克服する力が低下していると言われている。子どもたちに内在する「よりよく生きようとする力」を信じ、学校・家庭・地域が一体となって、生命を大切にする心や他人を思いやる心、善悪の判断、規範意識等の道徳性が養われるよう、道徳教育の一層の充実が必要です。（『考え、議論する道徳を目指して』京都市教育委員会より）

小学校では、平成30年度より「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」（道徳科）となった。「特別の教科 道徳」の目標は次のようになっている。「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」

この目標を達成するためには、単に「道徳的価値についての理解」にとどまっていはいけない。「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」ために、これまで以上に深く考え、「自己の生き方について考えを深める」授業実践を行う質的転換が期待されている。これまで本校においても、「特別の教科 道徳」を本校教育の研究の中心と位置付け、取組を進めてきたところである。

しかし、実際の道徳の授業において、「発問が不十分であったため、話し合いが深まりにくかった」「教師の意図する価値へと児童の思考を誘導し、価値の押し付けとなってしまった」等の反省や課題が多くみられる。その結果、授業後の児童のふり返しには「〇〇は大切ということがわかった」という「道徳的価値についての理解」にとどまっているという実態がある。

そこで、低・育成・高学年部で授業における発問や教材の提示法や学習形態の在り方を吟味し、1時間1時間の道徳の授業を練り上げることで、このような実態を打開するきっかけとなりうるのではないだろうか考える。道徳の時間に「ハッ」とする瞬間や、「なるほど、そうだったのか」と思える瞬間を創り出すような発問を精選すること、自分の考えと友達の考えとを比較し、今まで考えもしなかったような気づきのできる学習場面を設定すること、そして対話を通して子ども達同士がお互いに交流すること、学び合いを通して自分の考えをより一層深め、これからの自分に生かしていくような学習場面を設定することが、道徳的価値についての理解にとどまっているという課題を解決する鍵を握っているのではないだろうかと考え、本テーマを設定した。

「特別の教科 道徳」を本校教育の研究の中心と位置付け、激動の社会の変化の中でも、普遍的な人間性を磨く素地・基盤を築き、学校教育目標「いきいき なかよく りそうにむかって考動する子」の実現を目指したい。

3 研究の仮説

指導要領解説道徳編の道徳教育推進上の基本的配慮事項には、「道徳教育を進めるに当たっては、教師と児童及び児童相互の人間関係を深めるとともに、児童が自己の生き方についての考えを深め、家庭や地域社会との連携を図りながら、集団宿泊的活動やボランティア活動、自然体験的活動などの豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない。」とある。

教師や児童相互の人間関係を「特別の教科 道徳」の中で解釈すると、自分の思いや考えを教師や友達と表現し合うことであり、その経験を積み重ねることで道徳性の育成につなげていくことの重要性が読める。研究の中で特に深めていきたいことは、発問と板書である。発問は、道徳授業の実際に即して行う指導の手立ての一つであり、子どもの思考や話し合いを深めるといふ、極めて重要な役割を担っている。そして、発問と同様に板書も子どもの思考を深めるためには重要な役割を担っている。視覚的支援は、子どもの豊かな思考を支えるものである。

また、いろいろな人とのかかわりの中で自分たちが生活していることを感じ、子ども達にとって最も身近な学級という集団(社会)の中で、自分の考えを積極的に表現したり、友達の考えを受けとめたりする経験を積み重ねさせたい。本校の子ども達が「特別の教科 道徳」の授業を通して、道徳的価値への理解を深め、いろいろな人とのかかわりの中で学び合い、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てていくことができるのではないかと考え、研究主題を受けて、以下のような研究仮説を設定する。

研究仮説

道徳の時間において、物事を多面的・多角的にとらえることで、自己の生き方について、より思考を深める学習をすることができるであろうと仮定し、以下の2点を大切に取り組みたい。

- ① 発問・板書の工夫を活かすこと
- ② 対話と自己決定を大切にした学習活動を展開していくこと



《研究を進めていく上での大切な3つの視点》

- ① 「子ども達が道徳的価値の理解を深めるために」→中心発問と板書の工夫
十分に練り上げられた授業展開、発問となるように学年部で共同して事前研究に取り組む。
- ② 「子ども達が道徳的価値に興味をもって学習できるように」
指導者がその時間ねらいとする価値について子ども達が興味をもって学習できる教材の選択や提示方法などの工夫をする。
- ③ 「言語活動を通して自己及び他者への理解を深めるために」→主体的・対話的で、深い学びの実現
授業の中で、子ども達が自分自身を見つめなおしたり、自分の考えを表現したり、友達の考えを受けとめたりしながら学びをすすめていくことを意識して取組をすすめる。
表現方法・・・一人ひとりで、小グループで、学級全体でと様々な形態の中からの選択・自己決定。
口頭での表現、ロールプレイ、討論形式での表現(ネームプレートの活用)、
ワークシートへの記入。
子ども達の実態に合わせてより効果的な形態や方法を選ぶ

4 具体的な取組

① 道徳の時間の授業研究・・・児童の実態に即した指導方法の研究

- ・発問の吟味・精選。
- ・自分の思いや考えを語り合える活動の設定。
- ・児童の思いや考えをまとめる分かりやすい板書の工夫。
- ・自分を見つめなおす, 主体的な実践力につながる気持ちを高める展開後段・終末の工夫。
- ・自分の思いや考えが書きやすく, 評価につながるワークシートの工夫。

②道徳的实践力の育成を目指しての環境整備

- ・1時間1時間の道徳の時間での学びを積み重ねていくための道徳ノート・ワークシートの活用。
- ・各教室前の道徳掲示板の活用を通しての, 児童・保護者・地域への発信。

③家庭・PTA との連携

学年部の目指す子ども像

(昨年度の目標)

低学年部……きまりを守って, みんなと仲よくする子

育成・高学年部…価値観や考え方の違う他者を認めるとともに, 互いの思いを伝え合い, わかり合える子

(今年度の目指す子ども像)

低学年部……自分の思いを伝え, 相手の思いを聞くことを通して, みんなと仲よくできる子

育成・高学年部…互いの思いを伝え合い, 違いを認め, 共感し, よりよく生きようとする子